

昭和
和和
四十七年

七月
月二十三
日

第三
行(種郵便物認可)
每月一回・十五日發行

(通第二七五号)

慈

光

第二十四卷

第四号

次

親鸞聖人の絶対信……………近角常観……………(1)

浄土の音楽……………福島政雄……………(6)

一道会の記(三)……………榊原徳草……………(10)

医学新道……………高原誠……………(14)

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

晩年の积累……………花田正夫……………(19)

親鸞聖人の絶対信

『真の善知識』

近 角 常 観

一 私が『歎異鈔』の御縁

これより聞いて頂くと思うのは「親鸞聖人の絶対信」というような意味にて、なお別に「真の善知識」と題しておいた。要するところは聖人の信仰の至極を聞いて頂くとするのであって、それは即ち平日話す『歎異鈔』二章の精神を充分味わせてもらって見ようと思うのである。

私としてはこの頃も、ことにこの二章を有難く喜ばせて貰うている。如何にもこの鈔はありがたく、読めば読む毎に「こういうこともあったか」と、黄金を掘り出す如きありがたき聖教である。ことに二章を述べさせて貰うとなると、私としては深き昔の因縁が想い出されて来る。

それは私の父が常にこの「歎異鈔」を読んで居ったことを子供心に私は眺めて居たのであった。言うまでもなく今日青年の間にこの鈔が行われるようになったのは、清沢先生が、本鈔を青年の間にすすめられたがもとである。が

私としては父が少数の信者を小寺の御堂に集めては本鈔を讀み聞かせ「……たとい法然上人にすかさせまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候」などと、感に堪えぬ風にて話して居ったのを「どうしてあれをあんなに喜ぶのか」と、眺めて居ったことを思い出すのである。

また私が入信後に明治三十五年西洋より帰り、その年の御正忌に帰省して、両親に本山に参つて貰った。そうして私は留守をしながら、いささか御正忌を記念する心持ちにて、この二章に簡単な文句を書き加えたものを書いて居った。一つは当時、求道講話を始めて居ったので、私が帰國してそれが不在になる。即ちそれを送つて講話の席で讀んでもらうためであった。それが今日の『信仰問題』の中に「親鸞聖人の信仰」なる見出しになって遺っている。さほど深い考えがあつて書いたものでもなかったが、当時書き

終ろうとするところへ両親が京都から帰つて来られた。そこで「こういうものを書いた」と両親に示したところが、父が「それは有難いものが出来た」と非常に喜んでくれたのであった。私が「も少し書くつもりだ」と云うと父は、「これ以上書いてはいかぬ、書くな」と止められた。併し私は書きたいから書いて見た。するとそのあとがもう書けぬ。こんな筆はないがとつとめたが、そのあとがもうどうしても書けなかった。その後これを当時の『求道』誌にのせ、諸方から礼言うて来て下されたが、その一番はじめに言うて来てくれたのが私の従弟——日露戦争で戦死したのが言うてきてくれたのであった。この頃『歎異鈔』がありがたく思わせてもらうにつけ、私としてはこれらの因縁が想い出され、唯事ならず思わせて貰うて居ることである

二 『歎異鈔』二章

そこで、今ここに『歎異鈔』をお聞き願おうとするにつけ、私が今手にしているのは西洋に同行した友人、池山栄吉君が、よろこびの余り、ドイツ語に翻訳されたものである。まずはじめに二章の全文を拝読しよう。

おの／＼十余ヶ國のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。

しかるに、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。もししからは、南部・北嶺にもゆゆしき学生（がくしよ）たちのおおく座（おわ）せられてせうろうなれば、かのひとびともあいたてまつりて、往生の要、よくよくきかるべきなり。

親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よきひとのおおせをかふりて、信するほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずせうろう。そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にもおちてせうらわばこそ「すかされたてまつりて」という後悔もせうらわめいずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞし。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば、法然のお

おせそらごとならんや。法然のおおせまことならば親鸞がもうすむねまたもてむなしかるべからずさうろうか。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。

このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々(めんめん)の御はからいなりと云々

むしろ私がいらざる言葉を加えずに、これだけを拝読した方がありがたい。これだけ拝読した上に親鸞聖人の絶対信の有様——法然上人の仰せを有難くそのまま頂かれたる聖人の絶対信の有様が、十二分にあらわれてある。

なお外に『執持鈔』(しゅうじしよう)とて、覚如上人のものされたものがある。これがまた有難き聖教にて——執持は云うまでもなく執持名号の意味である。即ち我々の心に深く執り持つべきところを書かれたものだろう。ことに上人が執持の文字を標されたところよりうかがえば『口伝鈔』『未灯鈔』等の聖教ありて、それをいずれも盛んにお頂きになったものであろうが、殊に上人が如信上人よりお伝えをうけられたところがあつて、上人自身に深く執持しておられるところのものであつて、それをお書きになったものであろう。

その二章がまた『歎異鈔』の二章と同じであつて、それを拝読すると『歎異鈔』に言うてあつて、しかも氣のつき

「もししからば南都北嶺にもゆゆしき学生たち、おおくおわせられてさうろうなれば、かのひとびともあいたてまつりて、往生の要、よくよくきかるべきなり」

それなら南都北嶺の学者達に行つて聞かすべし。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人、法然上人の一言の御教化をこうむつて」それが心根に徹して有難かつた外に何もないのである。

四 池山氏及びその夫人の実験

今いう『歎異鈔』のドイツ語訳者、池山氏は私と共に西洋に行き、今日やかましい労働問題、社会問題を研究してわが国において今(大正十年)から十七八年前に、早くにそれに手をつけようとせられた方である。そうしてそれがなかなか困難で、そのために非常な苦勞をせられた。極めて孝心深い方で、その母御が昨年亡くなられた。

どういうことであつたか兩三年前に「自分は何故こうした浅ましい思いが起るのであろう」自分ながら変な思いの起るのに驚いて、思わず南無阿弥陀仏々々々、口に念仏が出ると同時に、今の「親鸞におきては唯念仏して云々」の

難しいところを、知らせて貰うことが出来るのである。

三 『別の子細なし』

まず、今の二章の文のはじめには、

「おのおの十余ヶ国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころぎし、ひとえに往生極楽のみちをといきんがためなり」

如何にも関東よりはるばる十余ヶ国の境を越えて、身命を顧みずして、聖人のお跡を慕つて、京都に聞きに來られた当時の信者のありさまが見える。また、それ程いのちがけで聞きに來られたの故、それが並み／＼の不審でなかつたことが察せられるのである。

「しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころにくくおほしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり」これが唯一応さういふむつかしき理屈を云うので無いと言わゆるのなら、それは関東の信者は常々うけたまわつて知つて居つたのである。けれどもさう聞いた上からも、矢張り「ころか、あゝか」のむつかしきことになつてくるからはるばる京都まで出て來ねばならぬことになつて來たのであつた。故にさういふ風に何処までも何か變つたことがあるように思う。それが大きなあやまりだと仰せられるのである。

一言がいなすまの如く氣がついた。「ああもう自分如き者は、この唯念仏のお慈悲の外に無い」と、それから念仏を喜んで、即ちそれよりは仰せの如く、夙夜に唯念仏ばかりしておいでになるのである。

氏は久しき前より岡山六高の教授をして居られるのであるが、それが教授室であろうと教室であろうと、唯南無阿弥陀仏々々と、即ちそれがお言葉通り「……仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」である。即ちこの御一言の味はこれで頂くことが出来る、外に變つた味があるのではない。併し、この池山氏のは、よくよくの事に思われたことありて、そこを頂かれたのであるから、これを軽いことに思うてはならぬ。

また氏の夫人は一昨年、胃ガンで亡くなられたのであるそれが胃の具合が悪いとて病院へ診てもらいに行き、医師が診察して「どなたか、お宅の方に遇いたい」と言つた「しますとここにありますこの塊りは」と聞くと「イヤその塊りのことについて」と言われるのを聞くなり、忽ち絶望、千尋の暗黒に墜落して、もう立つて居られぬ、身体がグラグラする。その時に思はず

「ああこじや、もう仕様が無い、かねてここを助けて下さらうとの広大の仰せであつたか、ありがたい——即ちこの暗黒を見て下さらうとの、思いがけなき大悲の仰

せが、唯念仏して弥陀にたすけられまいらずべし、であ
る——もうこの上は、このお慈悲に手を執られて如何よ
うになるうとも、と、一念ここに気がつくなり、先ず思
われたことは、若しこれが他の者であったら仕方が無か
ったに、自分であってマアよかった。主人や他の者であ
ったら、どれ程困ったか知れまいに」と。——
こは、今日ドイツ語訳『歎異鈔』を言い出した御縁から申
させてもらったのである。

即ち、こういう味が「唯念仏して……信ずるほかに別
の子細なきなり」である。しかるに一般真宗信者の言うて
いる唯念仏の唯は、甚だ軽い。物のただ貰いの只になって
ある。しからず、今ガンで仕様が無いという時に、その仕
様の無いのを哀れみ、見捨てぬとの大慈悲の顕現が南無阿
弥陀仏である。そのおこころを頂くと、もうこのお慈悲ば
かりであるが、唯念仏の味いなのである。



浄土の音楽

福 島 政 雄

ふと何かが心に浮かぶということは、誰にでもあること
であります。仏教の唯識論で阿頼耶(あらや)識というの
は、なか／＼むつかしいようであります、主観客観の根
本であると聞いていますから、私共のいのちの根本になっ
ていて、一切を撰め入れ一切を表現する根本識(こんぼん
しき)と考えて宜しいかと思えます。その阿頼耶識から浮
かび出るのであります。七十八を越えた私には不
思議なことがあります。少年時代青年時代によく歌った歌
がおもいもよらぬ時に不図心に浮かんで来ます。しかもし
つこく浮かんで来て心の中で繰返し歌うのであります。
幼少の時に母から教わった歌にこんなのがあります。

鳩ととんびと雉子と燕と雁がねと鶯の鳴く音は、グー
グーヨリケン／＼オヘヒヨオッケン／＼ノキンチャ
ククチヨウチンからリンデホウホケキヨウ

中学済々賢時代に歌った校歌の最初のところがよく心に
浮かんで来ます。

東を仰げば阿蘇の山

菜の花にたはむる蝶ぞあはれなれ おのが身を焼きたねと
しらねば

鬚(ひげ) 白く頭ははげてひかれども 浮世心のはげぬか
なしき

いつもくるいつも人がいつもする いつものはなしいつ
も尊し

夜もすがら枕をてらすともしびは 仏の慈悲のひかりなり
けり

狸めほどの手にしても狸なり 狸はたぬきそのままにして

おそるべきものは天魔や悪魔より ほめてあがめてものく
れる人

ものくるる人にひかるつかはるる 牛となる身のはてぞ
かなしき

国のしずめと天そそり

西に臨めば不知火(しらぬひ)や

心つくしの海深し

鬼將軍の名も高き

大樹(おおき)の銀杏(いちよう) 蔭仰ぐ

熊本城のうしとらに

築き建てたる済々賢

母の歌が浮かんで来れば母のことをしみじみと想い起し
ます。「東を仰げば」の歌は中学時代を想(おも)い起こ
させ、熊本の自然、山や川や海を想い起こさせます。

青年時代に歌ったものでは秋風五丈原の歌がよく心に浮
かんで来ます。

祁山(きざん) 悲秋の風更(ふ)けて

陣雲暗し五丈原

零露(れいろ)の文(あや)はしげくして

草枯れ馬は肥ゆれども

蜀運の旗光なく

鼓角（こかく）の音も今しづか

丞相（じようそう）病あつかりき

此の歌は孔明をうたった長い歌で若い時の私は全歌を暗記して居りました。土井晩翠翁との最後の会見の時のことが想い起こされます。翁は涙を拭き、「私は明日死んでも宜しい」と言われました。併し往生浄土の信仰の上から言われたのではなかったようであります。

私の心にしづく浮かんで来る色々の歌は多くは少年青年時代にうたったもので、仏教に関するものではありません。そのしづく浮かんで来るということについては、私は考えさせられています。私が若し少年時代から仏教の空気が中に育てられていましたならば、親鸞聖人の御和讃などがしづく浮かんで来たであります。二十六歳からはじめて聖人の御教をいただくようになりました私には、今八十余歳の齢になりましたも浄土和讃や高僧和讃などがしづく心に浮かんで来るということはありませぬ。ただ愚禿悲歎懷和讃が折にふれて浮かんで来ます。

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実（こけふじつ）の我が身に

清浄の心もさらになし

あまりにしづく／＼と浮かんで来るのではありませんが、

浮かんで来る時はしみ／＼と我が身のすがたをふりかえらせられる時であります。

このような唯今の私の心境から聖人の晩年のお心持を推し量るのであります。それは甚だ潜越（せんえつ）であるというそしりを受けることでありましたが、併し聖人が晩年に色々の御和讃を御述作になったことは、聖人のお心に或る音楽がたえず響いていたことを物語ると考えることは無理ではないと思ひます。或る老僧のお方から承ったこととありますが、聖人はあの御和讃を或る節調で始終お歌いになったにちがいない。惜しいことにはその節調は伝えられていないということとあります。聖人の御和讃を文学的でないといふ批評する人もありますが、それは立場のちがいであって、文学的ではなくとも音楽的であることはたしかであると云われます。聖人は六句ずつを一節としてお歌いになったと思ふと云われます。これはなか／＼味わいのある説であります。

聖人の晩年にはお心の中に始終音楽がひびいていたといふことは私にも想像がつきます。その音楽は浄土の音楽であったと思われまます。浄土の音楽とは何でありましよう。それは人の心を底の底まで静かにする音楽であります。大無量寿経の極楽浄土の莊嚴の段を読みますれば、そのような音楽があるといふことを私でも想像が出来まます。この娑

婆世界の音楽はどうも賑かなものが多いようであります。その中にも心をしづめる音楽が無いではありません。かの住蓮・安楽が六時礼讃の勤行に、十七才と十九才の鈴虫・松虫の局（つぼね）が念仏礼讃の声に信心肝に銘じたといふのは静かな宗教音楽に深く感じたものであります。東洋日本の音楽には静かなものが随分あるように思ひ

ますが、西洋のものでも例えばベートーヴェンの交響樂の或る段、或は新世界交響樂とかいうものなどは心をしづめます。聖人は信仰の境地に深く心をひそめて、大経などは心の底の底まで染み込むように繰返しお読みになっていますので、浄土の音楽を体得せられたに相違ありません。無限の静寂の音楽を聴いておいでになり、それが繰返し／＼晩年の聖人のお心に浮んだと思われまます。それだからこそ御和讃の御述作も出来たのであります。

宝林宝樹微妙音

自然清和（じねんしやうわ）の伎楽にて

哀婉雅亮（あいえんがりやう）すぐれたり

清浄楽（しやうじやうがく）を帰命せよ

この哀婉雅亮というのは、あわれに、澄み、正しくゆえたりとあり、たおやかにとありますが、これは聖人が九才の時から叡山できかれた音楽を元として、それに大経の法音が清揚哀亮微妙和雅であると言われてあることと一つに

融け合い、聖人の静かに深い御信心と一つにひびいて、聖人のお心は何とも言えぬ浄土の音楽がいのちの底に絶間なくきこえていっているという有様であったと思われまます。

このように考えて御和讃を拝読して参りますと、御和讃の声のひびきが音楽的であることが感ぜられます。それは浄土の音楽がこだまするひびきとも言うべきものであります。私どもはそれによって心の底から落ちつかせられて行くのであります。私どもは謡曲などでも文章言語を超越した音のひびきを感じることがあります。理知的に説明しようとするれば到底説明出来ない、不思議な文句がうたえば心に入るのであります。

聖人の御和讃は文学的でなくても音楽的であり、しかもそれはいのちの底に静かにひびく音楽であります。いのちをしづめる音楽であります。浄土の音楽がこだましてひびいていっているものであります。今日の声明（しやうめやう）が聖人の心にひびいた浄土の音楽の調子であるとは言えないかも知れませぬ。聖人のお心にひびいた節調が伝えられていないのは残念であります。

顔容端政（げんやうたんじやう）たぐいなし

精微妙軀非人天（しやうみみまよやくひにんてん）

虚無之身無極体（こむししんむごくたい）

平等力（びやうどうりき）を帰命せよ

漢語ばかり並んでいるようでありますが、これでひびき
が全く音楽的に感ぜられます。御和讃の中の高調したところ
は殊に音楽的であります。

八十三の老年になって、歌がしつこく心に浮かんで来ま
す私の唯今の心の状態が御和讃に結びついて御和讃の音楽
が本当に深く私のいのちにひびくことを私はねがいます。
併しそれはなか／＼むずかしいことでありまして、私が生
きているうちにそんな境が開けるといふことにはならな
いかも知れませんが、併し聖人の御教に生きています私には
そのようなことが念願として心の中にあるのであります。
私は或る意味ではいつまでも青年としてその心境の開ける
時を待ち望むのであります。

昭和四十七年二月十五日



池山先生のことば

○ 念仏とは

一体念仏とは何か。

それは呼びかけである。救いのために現われた力が、目
指すものへの呼びかけであると、私は云う。

ここで救いというのは、徹底的の救い、未通りたる大慈
悲の発動による人格の無上完成という意味である。

その救いを目的として、これを実現せんがために現われ
た力が、目指すもの、すなわち、私達への呼びかける声が
念仏である。

○ 念仏は粥である

重病人の胃腸の弱った人には柔かいお粥だけがよく救う
ことが出来る。念仏はいずれの行も身につかない者への弥
陀仏の大悲心から成就して下さったお粥である。

それをそれと知らないで、「粥でもない」と最下位の価
値を認める者、「粥もいい」と他と同位価値を認める者、
「粥がいい」と他より上位に認める者、更に「粥にかぎ
る」と、相対的な最上位の価値を認める者もあるが、そう
ではない。

「粥でなくてはいけない」と絶対価値を認め、そのひと
りばたらきにまかせて頂く者が仏意にかなう人である。

一道会 の 記 (三)

榊 原 徳 草

松本先生のお話は深い感銘と緊張のうちに終り、続いて
西元宗助先生の感話の大略を誌しましょう。

池山先生亡くなられて三十四回忌、こんなに沢山お参り
になりましたが、改めて思いますことは、池山先生の御徳
は申上げるまでもありませんが、全くこの浄住寺さん、榊原
先生御夫妻のお蔭である、もし榊原先生が居られなかった
ら多分この会は無かったかも知れぬと思うわけです、如何
でございましょうか、そのことを頻りに思いますことです
それから情実的ですが、今日は大変珍しい方が見えて
おられました、本当申せばそうした方がみんな一言ずつ
お話し下されるようにお考え頂けるとありがたいと思いま
す。

さて、どうしてもここで御紹介しておきたい方を申上げ
ます。まず徳草先生御夫妻ノ徳草さんと云った方がピタ
リするんですが、私は元来アマノゾクで家内が一番よく
知っています。今日父ちゃんコーヒーですかというのと、イ

ヤ紅茶だ、という。紅茶にしましょうかという、コーヒ
ーという。何でもかんでもそういうタチでございまして
徳草さんと共通点の多いので、徳草先生とその御家族の方
のことは多分一番よく存じあげている一人かも知れませ
んそれ程私の御因縁の深いのであります。

次に、今日、この「信を行く旅人」池山先生の書物を頂
きましてありがとうございます。このことは徳草先生の奥
様の御実家——私は徳草先生も御立派ですが奥様はもつと
立派である、私はそう思うております——その御実家の弟
様、杉浦豊様御夫妻からの御供養であります。豊さん御夫
妻も今日おみえになっていますが、その御息が、私の所
と同じように亡くなられました。本当に深い悲しみの中に
居られます。しかしそれが御縁となって弥陀の大悲をい
いよ渴仰せられるようになり、その記念に池山先生の著書
を再版して下さい私共に頒けて頂いたのであります。この
ことを御紹介しました。

それから、川畑先生がみえますが、あとでお話されると

思います。なお福本慶子さんのお顔も見えます、現在私共と同じ京都府立大学の家政学の先生です、この方は奈良の女高師時代から池山先生のお導きを喜ばれた人です。

また龍谷大学の千葉乗隆先生、この方は学生時代この浄住寺から通学せられました、先生は今日欠席せられました。が奥様と御嬢さんが徳島からはるばるお参りされました。

なお北米とカナダからの留学生の方々も来ていましたが先程用事が出来て帰られ残念でした。「慈光誌」でよく御存じと思いますが、木村無相さんも今日ここに来ていられます。この方は大した方なんです、九州で工業学校を卒業、フライッピンに渡っているうちに感ずることがあって仏道を求め、高野山でも随分長く修学修行し、一方に浄土の教もうけられました。とうとう親鸞聖人の本願念仏に深く帰入されました。現在病身であります、お念仏申されながら東本願寺の同朋会館の門衛所につとめていられます。なおテープレコードを取っていられるのが直樹さんで、この寺の跡を継がれる方です。

これだけで私申上げる役はすみましたが、一言加えさせて頂こうと思います。今日は池山先生の御年忌であります、私、やっぱりアマノジャクなんです。学生時代、池山先生と皆が云うもんですから、池山ってなんじやい、親鸞会、それがなんじやという、どうもそういうところ

す。このお話の様子は鮮かに記憶にあります、今日まで私の心に刻まれております。

また私は「ありそなこと」と云う題で、ドイツの文士チヨケの小説を引用されて、参議ストロークが、竹馬の友に裏切られ、愛人にそむかれた涙の経験から、人生にはどんなことでもあり得ると気づき生涯それ一つに浮き沈みして来た体験から、我が子に「ありそなこと」という言葉を真似せよ、そしてそれが身心に徹して所謂、骨化する時、人生の苦しみの半ばは消えうからと勧めるといふ筋のものである。そこに歎異抄の十三章の宿業、そして「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」と、煩惱具足の我等が業報のすべて「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」というおこころをお話下さったと思うわけです。

私は今度の戦争でシベリヤへ引っぱって行かれました。思いがけないことと思うと同時に「ありそなこと」を思い浮べました。その他私自身に今まで色々なことに出遭いましたが、そのたびにナンマンダブツと、そう念仏申してこれもおこるすべのこと、よかれあしかれ「ありそなこと」どんなことに遭っても、これは自分にありそなこと。この言葉が私には実に深いのです。

ろがありました。これは京都に居る時が短かったせいもありません。池山先生がお亡くなりになった時も京都に居りませんでした、蓮華谷の先生宅へも一度しか伺ったことがありませんでした。

私は師である福島政雄先生が、ある時「近角先生から池山という人を聞いてはいるがお目にかかったことはない。池山ってどういう方か？」と聞かれました。「そうですね、池山先生という方はお釈迦様からか、親鸞聖人からかその何れかに直々聴かれた様な方です」と申しますと、「お年のほどは」と福島先生が云われました。「そうですねお釈迦様から直々聴かれた方ですから多分二千何百年経っていられるでしょう」と申すと「そんな老人ですか」と先生が云われる。「そうじやないんです、そうかと思うと永遠のモダンボーイ、お氣持の若い、ことは西元よりもつと若い、赤いネクタイ締めてもうつります」とお答えしながら我ながら的確に申上げたと思いました。つまり、本当の人間、もっとも古くしてしかも永遠に新しい、これは私が池山先生に対する感じであります。それからその外の尊い方に対する感じもそうであります。

さきほど榎原先生が、一番最初にお講話を聞かれたのは下総会館で「継母（ままはは）」という題であったと云われましたが、あの時のお話は私も非常に印象がふかいので一つ。時間をとってすみませんが、自分のようないたらない者にとつてはこの言葉がですね、つまり煩惱具足の凡夫ということでもあります。十二月八日はお釈迦様の成道会が参りますが、一体、お釈迦様のおさとりとは何だろう。普通は降魔成道、悪魔を降してさとりを開くと申しますね、私これにかねがね疑問を感じております。どうもすつきりしない、お釈迦様ともあろうお方がですね、悪魔と云う煩惱と喧嘩して煩惱を圧えつけてさとりを開く、これではキリスト教的なんです。どうも合点が行かない。種々と教えられてハッと気がついたことは、本当のことは人を悪魔にするんじゃない、悪魔とは自分であると気がつく、外から愛欲とかその他いろいろの悪魔が押し寄せて、それを退治するんじゃない、本当に悪魔とは、他でなくて自分であったと気がついた、これに違いない。又尊敬する学者であられる宮本正尊先生に高野山大学で御一緒になった時、「先生は家でいられますが、すくなくとも大無量寿経における積尊はこうではございせんか」と申しあげると、意外にも先生は「自分もそう思う」と言われる。本当の悪魔とは私自身です、え、こと気がついたと思いましたが、イヤ気がついたんじゃないやありません、教えられたんです、唯可信斯高僧説です。これである筈なんです、そうじゃないですか。他を悪魔と思ひ、これを退治してしま

ことが出来ると思う、これが自力の執心という。悪魔は自分でである、ここにはじめて積尊の根源的なさとりが展開されていく。まあこういうことなんです。

そこで私という凡夫、私は業が深いとか凡夫であるというが、本当にそう思っているか。私は今日、本当に有難いですよ、しかし此所に来て神妙な顔をせんならんと、そう思うと一寸しんどいなあとと思います。池山先生は悠々として本当に解放されている、大信心の世界は解放の世界です、もっと自由である、あそこに行ったら有難くならにやならぬと思う。そこに問題があります、どうしてもそうなれん、どうしても有難くなれん、と。

そこで、信心を頂こうと、そこに一つの型を作って、その型に当てはめ、どうにも信心の頂きようがなくなるのです。しかも驚くことには、このどうにもしてみようのない者こそね、おたすけ下さる本願です。その本願の思召しを聞かせて頂くばかりです。

最近知らされたことですが、西田幾太郎博士の全集の最後に、非常に注意すべき文章があります。その中の書翰の中に、あの頃田辺元博士の「懺悔道の哲学」という本が出版され、世間の注目を浴びましたが、この本を徹底的に批判していられる。「世間では懺悔道の哲学をほめるが、この書物は自力聖道門という。田辺は懺悔が出来ると思つと

るから芽出度い。大体凡夫の自覚というのは、凡夫と気づくことは、仏からの呼びかけである。歎異抄でいえば〃しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば〃とある、煩惱具足の凡夫と気がつくことはわが力では出来ない云々〃、いうようなことを云っていられます。

自分が罪悪感に徹底して信心を頂くということは不可能であります。罪悪感に徹底出来るのであれば、弥陀仏の本願の念仏もいりません、罪悪感にも徹底出来ぬ者かねてしろしめして本願の名号があらわれて下さるのであります御本願のまことを聞信させて頂いてはじめて煩惱具足の身、弥陀の光明に照らされてはじめて救われる身でないことを知らされます。仏を信する心すらない者に、救わずにおられない弥陀仏のおまこと、これをいただく、これを信といわれます。

長い時間を頂いてありがとうございます、これで失礼いたします。

未完



医学新道

「現代科学の中でも、医学はことにめざましい進歩をとげた。だが、療養道には未だ百鬼夜行の観がある。悲しいことである。

癩病をもってこと足れりとするものは、病人それ自身を見失っている、医薬万能の弊である。精神力をもって一切を克服し得ると説くものは、病氣それ自体を否定するインテキ宗教の迷夢に外ならない。科学は厳粛である。それに反するものは落伍する、迷信であるからだ。また科学に墜するものは行きつまる、科学の価値にも限界があるからだ。われらは仰いで科学を超えたる世界をおもおう。これが法の世界である」

これは「水の味」の著者、高原憲の自序である。思うにこの法の世界とは、浄土真宗の教えの世界である。抗結核剤の出来なかった時代に結核患者を見てきた医者切なる訴えともとれる。それは、当時、結核、即ち死という現実を目の前において苦しみに耐えてきた医者姿とも言える

高原 誠

(是真会病院院長)

しかしながら、現在結核薬も出来、癌に対しては早期診断の方法も確立したということだけをとりあげても、医学はあまりにも現象を追ったものでしかない。なぜかというに、医者はそれに科学的な根拠をもって確答出来ない淋しい存在である。ヒポクラテスが云った様に

「病は天が治し、報酬を医者がもたらう」
この数千年前の言葉が、現在でも言えることは、医学の方法論は確立されたとしても、生命のとびらは固く閉め塞ぎされている。人間は血の一滴だに作り得ない。

思うに医学教育を志すもの、医学教育を行うもの、すべてがこの様な現実を踏まえて、それを行っているかということとは甚だ疑問である。医学教育を志しているものは、あまりにも医学の本質、即ち生命に対する謙虚さを知らない。医学が生命のとびらを開く鍵を与えてくれるかのような錯覚にとらわれている。それだけに、医学教育を終り、大学院、またはその他の場所に住んだ時に空虚さが残る。そ

これは当然のことである。医学教育を行うものはまた同じである。医学は生命の分析の本質からかけ離れがちなものとなっているからだ。

最近、若い医学生と接する機会が多いが、私はいつもこの点についてよく議論をし、私なりの医学のあり方について考えているが、結局のところわからない。わからないからと云って医者を守るわけにはいかない。それは医学をもって日常の糧にしていることにも問題がある。

私の住む長崎市には大学医学部があり、開業医、それに病院が沢山ある。そして患者は転々としてその間をねりある。医者は患者の苦痛を取り除き、それでもよとしてしている。患者もそれを喜ばしいこととしている。そこに私は問題があるように思えてならない。

患者と医者はいい対するものであろうか。私は患者と医者が同じ方向に歩む姿にこそ、療養道が展開するものと思う。病気を治すのではない、病気という機会を通じて、患者と医者が生命の尊厳を感じ、生命の神秘にとまどい、試行錯誤しながら、如何に生きべきかという命題を考えなければいけない。そこに医学の本質に触れた道が存在すると私は思う。私はこの歩みを医学新道と考えている。

さてここに、医者と患者が対立でなく同坐するということとは非常に大切なことであるが実践上至難なことである。

念 仏 詩 抄

三 心 十 念

至心というも

如来のマコト

信樂というも

如来のマコト

欲生というも

如来のマコト

マコトの結晶

ナムアマミダブツ

三心十念

ナムアマミダブツ

慈 光

慈光はるかに

又限界のある科学の世界に居て、それを超えた世界を求め
ることは、残水の小魚が涸渇をしらぬ大河に出ようと願う
に等しい。この不可能事を可能化される唯一の扉が「聞
法」にある。亡き父高原憲が患者にも勧め、自ら聞法をも
って生涯を貫ぬいて療養真道を実践してくれたことは、私
にとつて大きな燈炬となっている。

去る二月二十日、無事に父の三週忌を終り、療養道の私
の一里塚としてこの一文を草した次第である。

昭和四十七年二月二十九日。

×××

×××

×××

高原憲先生の短歌

何もかも我一人のためなりき今日一日のいのち尊し

はつかしや医師くすしとなりて四十年自然治癒をしりそめし我

はずかしや味なき水に味つけしわがはからひのあはれかひ
なき

われながら磁針の北をさすがごと我が足跡は西へ向はん

木 村 無 相

これの世の

浊悪の身に

かむらしめ

み名とあらわれ

照します

ナムアマミダブツと

照らします

// 慈光はるかに

かむらしめ //

自 分 を

自分を ひらく鍵

自分を ひらく鍵

自分を ひらく鍵

ナムアマミダブツ

自分が ひらかれると

自分が ひらかれると

自分が ひらかれると

天地いっばい

ミダを

ゆきつまったら

ナムアミダブツ

ゆきつまらんでも

ナムアミダブツ

この世のことも

ナムアミダブツ

あの世のことも

ナムアミダブツ

ミダをはなれちゃ

わたしはたぬ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

みちづれに

おまえ どうする

墮ちるが どうじゃ

わたしや 墮ちます

墮ちるが 性(ししよう)

ナムアミダブツを

みちづれに

浄土門

もたもた 苦にする

ことはない

もたもた やめろは

聖道門

もたもたのままが

浄土門

もたもた めあての

ご名願(みょうがん)

み名におこころ きくのでししよう

// 弥陀の名号 となえつつ

信心まことに うるひとは

み名におこころ きくのでししよう

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

フシギ

小鉢のケヤキの

糸のような

枝に

チョッピリ

春が

芽を出した

いのちの

世界の

フシギさよ

四六年三月十五日

もたもたのまま
ナムアミダブツ

ナムアミダ
ナムアミダ

大行とは

// 大行とは

無碍光如来の

み名を

ナムアミダブツ

となえつつ

—— Kさんへ、カゼ見舞に ——

カゼをひいたら セキがでる

ねんぶつでるのは ナゼでししよう

自力他力は さておいて

ねんぶつでるのは ナゼでししよう

おやさまはなれぬ ししようでししよう

おやおこえの ナムアミダ

はなれず呼んで ナムアミダ

晩年の釋尊

花田正夫

私如き者が大聖釈尊を仰ぐ時、そしてそのことを語ろうとする時、何時もためらわされることは、仏徳を傷けはすまいかということである。こうした私にゲエテの語録に

「ある人が私に向つて『君はしきりに詩聖ホーマーを研究するが、君にはまだホーマーが解つて居ないじやないか』と云うたことがある。私はそれに次のように答えたか』と云うたことだ。しかし太陽や月や星が解らないのと同じことだ。しかし太陽や月は私の頭上に動いている、それを見たり規則的な驚くべき軌道を観察したりして、私の身は今如何なるものであるかを知り、又未来には如何になるべきかを考えることが出来る」

とあるのを思い出された。云うまでもなく私は釈尊について解らないことが多いが、釈尊の徳光に照らされて心の闇を破られ、そこに私の煩惱具足の凡夫の姿も知らされ、その故に注がれる無限の大悲に生かされるよろこびを与えられている。この喜びの上から、二月十五日の涅槃會に晩年の釈尊をおしのび申しあげよう。

早速書架にある仏伝の三、四冊をひもといた。そして私自身も何時の間にか七十近くになったせいもあって、特に七十を過ぎられてのちの釈尊の伝記に眼をそそいだ。そこに今更ながら驚かされたのは、御身辺に続く大悲劇の数々であった。沢山の人々を導き、心眼を開かしめられた大聖の晩年なら、さぞかし万事うまく運ばれ、所謂、功成り名遂げられて、大満足の御生活であるうと想像し勝ちであるがわが釈尊は全くそれに反していられる。

ダイバの反逆

七十三歳の御時、親戚であり、仏弟子であったダイバッタの反逆があった。一般にダイバは始めから極悪非道の者と伝えられているが、性格は苛酷なまでに冷厳な律法主義者で、智慧もすぐれていたので沢山の人々の尊敬を得ていた。こうした立場から中道を歩まれる釈尊の弟子の導き方が寛容すぎると常に不満に思っていた。そこで釈尊に

「導師はもうすでに高齢に達し、長寿を完うせられて体力も衰えられている。どうか隠退せられて、教団を私に

おまかせ下さい」

と申し出た。釈尊はかねてからダイバの偏見を不憫に思召されていたので、律法主義の悪差別を指適され、またそのために和僧を破ることを叱責せられたと思う。しかし忠言耳に逆ろうのは今も昔も同様で、釈尊の慈訓もダイバの耳に入らず、それをうらみとして教団の独立をはかったのである。

王舎城の悲劇

ダイバは独立教団を造るために王舎城のアジャセ太子を外護者(げごしや)にしようとして、そそのかして父王ピンバシヤラを殺害せしめたのである。かくて新仏と新王とが手をとって全印度を統一し教化しようとはかった。

このことは釈尊にとっては悲痛極まりのない惨事であった。ピンバシヤラ王は早くから釈尊に帰依し、王舎城近くの靈鷲山中の竹林精舎にお参りして聞法隨喜の人であった。その王がわが子アジャセ太子に殺され、イダイケ夫人は夫王をたすけようとしてかえって宮中深く幽閉せられたのであった。そうなるには色々の遠因と近因があったが、智慧さとく、慈悲深い釈尊には言語に絶するお歎きもつてこの悲劇に処せられたことであろう。幸にも釈尊の善巧に恵まれてイダイケ夫人の心眼は開け、年ならずしてアジャセ王も大懺悔のうちに大悲を渴仰する人となり、生涯仏

法を身にうけてその外護者となり、良政をもって国をおさめるように転じた。

舎衛城の悲劇

次に釈尊の七十六歳の御時、有名な祇園精舎のある舎衛城に悲劇がおこった。時の王はハシノク王であったが、王も亦ふかく仏陀に帰依し、篤信の人となっていたが、その第二子であるルリ王子が、王の留守の間に王位を奪つてしまい、王は居所を求めて縁戚のイダイケの国に旅する途中に病死してしまった。

釈迦族の滅亡

ルリ王は権勢を得るにおよんで、かねて大恥辱をうけて怨念を燃していた釈迦族への復讐をはかった。王が大軍を率いて行く途上に釈尊は三度あらわれ、印度の灼熱した日中に枯木の下にあってはるかに故郷を眺めて悲傷され「親族の蔭は涼しいが、今や枯木になろうとしている」と王に告げられると、さしもの王も軍をかえした。

然し業道は厳然として動かすことは出来ない。この時釈尊の悲しみは劇しく傷悴せられて平素の威容も光を失つたと伝えられる。そのあまりにも痛わしいので目蓮尊者が進み出て、神通力をもって釈迦族を護らせて下さいと釈尊に申しあげた。しかし釈尊は「これはもともと釈迦族が自分の種族の優秀なことを誇り他国の者を蔑視するという悪因

を造っているのだから、その責めはどうしてものがれることは出来ない、七日の後に釈迦族は傷き斃れるであろう」と云われている。時に釈尊は七十八歳で、持病も段々悪化していた。

釈尊の予言通りに、ルリ王の大軍がカピラ城を攻め、多数の死傷者が続出した時、時の城主マカオ王がルリ王に懇願し「自分が池中に投身するから、やがて浮びあがるまでの間、城中の者の遁走を許して貰いたい。この責任は皆自分にあるので、どうかしばらくの間城中の者を逃して貰いたい」と伝えると、ルリ王もこれを許した。しかしマカオ王は仲々浮かびあがらぬので、これをしらべると、頭髪を水底の樹根に繋いで浮かびあがらぬようにしてすでに死んでいたと伝えられる。釈尊が一族から出られていても、マカオ王はその教化を十分に受け得ないでいたが、最後に一切の責めを我身にうけて懺悔の中に命を断つてるところに、釈尊の感化がほのかにうかがわれる。

さて戦に勝って帰ったルリ王は、兄のギタ太子が戦闘にも加わらず、城にあって平穏な生活をしているのを怒り、遂に兄をも殺害した。しかし段々に自分の罪のおそろしさに不安となり、地上の難をおそれて船にのがれたが、暴風雨にあって沈没し、また滅亡したと伝えられる。鹵止（はど）めのない業火の輪廻（りんね）の悲惨事であった。

と述懐し、又篤信の人が

苦しみをわが家とせばや苦しみのなきところとて世にはなければ

と詠じていられる。私共はいつか楽な時が、どこかに苦のないところがと、煩惱の幻影を追うて、性こりもなく迷い続けている。こうした世にあって、超人的な力を想定して、その力で苦から遁れようとする人々もあるが、はたしてそうした超人者が実存するのか、更に私共の求めるものが自分だけに都合のよい身勝手な願いではなかるうか。疑心の強い私にはそうしたことは信じられない。

唯残る道は業道に随順して、それを超える道である。随順即超絶とよく云われるところである。病む時には病むがよろしく候、死ぬ時は死ぬがよろしく候、となれば、病も死も受けて超えることが出来る。このことはよくわかるけれど、実際問題となると、それと戦って勝つことも出来ず、また逃げ去ることも出来ない。蜘蛛の巣にひっつかかった蜻蛉同様、もがきもがき力なくして終る外はない。

こうした中にある「煩惱のさかんな身とてあきらめることも出来ず、万策尽ききはてるより外ない我等を、覚者にまします仏はかねて見抜いて下さって、斯くの如き我等をことに憐んで下さるぞ」と親鸞聖人が、苦悩の心中に跳びこんで、救いの綱を渡して下さるのである。釈尊

以上、釈尊の御晩年を思うにつけ、わが親鸞聖人もまた障りの多い晩年であったことを思い併せられる。六十をすぎられて掃落、恵信尼様との別居生活、居住も定められず末娘の恵信尼様とのさすらい、又長男の善鸞大徳との義絶等々と人間親鸞とされてはいたましいことの連続であったと推察する。ただしそうした障りの多い中において和讃の述作、愚禿抄、浄土文類聚鈔、等々の完成をせられつつ、不滅の法灯を開顕し、讃仰して下さっていることは、私共にとってはかけかえのないありがたさである。何もかもうまくいって、世間から祭りあげられ、大伽藍の中に鎮座される聖人であれば、一切善悪の凡夫、身から出た錆とは云いながら業苦はてしない底下の群生の慈父とは仰がれなかつたであろう。

聖人が「凡夫というは無明煩惱しげくして、欲も多くいかり腹立ち、そねみ、ねたむころの常にひまなくして、臨終の一念まできえずたえずとどまらず云々」といわれ、和讃に「生死の苦海ほとりなし」とあるのも、そうした逆縁の中において仏智に照らし出された、人間実存の姿である。

歌人で九十六才で亡くなった窪田空穂氏が

老いぬれば心のどこかにありえんと思いたりけり

あやまりなりき

は大聖の身をもたれながら、業苦遁れ難きことを現わされてそこを越える綱をおすすめ下さるのである。

仏陀の入滅

七十九才になられた釈尊は、マカダ国の靈鷲山に滞在していられたが、やがて住みなれた地を離れ、郷里の方に歩をはこばれて、竹林村にたどりつかれた。その時恐ろしい病で激痛が起ったが、釈尊はよく堪えられた。阿難は釈尊に最後の説法を懇請した。その時

「阿難よ、修行僧らは自分に何を待望するのであろうかわたくしは内外の区別なしにことごとく法を説いた。何も秘蔵して隠してはいない。

また、わたくしは修行僧の仲間を導くであろうとか、或いは、修行僧の仲間はわれに頼っているとか思っているか、いない。

阿難よ、わたしはもう老い朽ち、齢をかさね、老衰し人生の旅路を通りすぎ、老齢に達して、八十になった。

阿難よ、譬えば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いているのだ。しかし真人は一切の相をこころにとどめることなく、寂滅の境に入って、無相無我に住すると云い、真実の法身は不滅となる。そうだから阿難よ、この世で自らを島とし、自らをよりどころとして、他人をよ

りどころとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」

以上のことは、中村元氏著の「パーリ本による仏伝の一節であるが、ここに、釈尊が自ら法に帰依し、その法は公道であつて隠すところもなく、万人の前に公開せられてゐることを述べられ、なを、自分は比丘の教団の指導者ではないと説かれてゐる。ここにはからずも「親鸞弟子一人も持たず」と仰言る聖人、一切善悪の凡夫をおへだてなき弥陀仏の大法を仰がれて、同一念仏者に御同行御同朋とかしずかれるおこころと全く一味なものを知らされる。

又盛者必衰、会者定離（えしやじより）の無常転變の世にあつて「ただ念仏のみぞまことにておわします」と不滅の法灯を掲げられる聖人と全く炬を一つにさされてゐるのに驚歎するばかりであるが、「如来の教法われも信じ人にもおしえきかしむるばかり」と仰言る聖人には当然すぎる当然であろう。

更に、自らをよりどころとせよ、法をよりどころとせよとの遺訓は、大乘教典中の涅槃經の中心、一切衆生悉具（しづく）仏性、と如来常住の真髓に發展したものである。

それから釈尊は老病を押して托鉢を行じ、帰られて、樹下で休息せられた。その時阿難に告げたまうには

「一番尊い供養である」と慰め、ほめたたえられた。

いよいよ最後の地にようやくたどりつかれた釈尊は、頭北面西右脇の姿で横臥せられた。その時サラソウ樹は非時の花を咲かせ、地にしいて仏に供養した。

釈尊はこれに対して、この靈樹が非時の花をもつて供養するけれども、これが真に如来を供養する所以ではない。能く法を受け、能く法を行ずることこそ如来を供養する所以である、と阿難に語られたと伝えられる。それについて法然聖人の御臨末近く、廟所のことをお尋ねすると、聖人は自分は廟所など無用である、たとえ賤が伏せ家であろうとも、念仏の声のするところがわが廟所であると告げられた故実を思いあわせられ、又「正法に不思議なし」の仏語も思い併せる。

そうした時スバツダという老行者があらわれたが、釈尊は病苦を押して親しく法を伝えられた。かくて段々御入滅の迫るにつれて、阿難の悲歎はことに劇しく、万感胸中に去来して断腸の思いで、涙がとめどもなかつた。釈尊は阿難をかえりみられて

「阿難よ歎き悲しんではいけない。生者必滅、会者定離のことわり通り、不滅なものはない。しかし阿難は長い間如来を尊敬し、よく仕えて、誠心誠意よく尽くしてくれた。汝は善い事をしたのだ、これからも精勵して行けば遠からず罪障を脱することが出来るであろう」と慈語をのこされ、このようにして、沢山の御弟子や信

「この世界は美しい、人間のいのちは甘美である」と云われたと梵本にある。老い衰えられて、死の近いのを知られ、心が澄み渡つた釈尊の「末期の眼」に、自然も人間も如何に美しく映つたことであろうか。

芭蕉翁は「見るもの花にあらずということなし」と云い、良寛師は「形見とて何かのこさん春は花、夏ほととぎす、秋はもみじ葉」と辞世をのこしている。自然は本当に美しいのだ、これを汚すものは我等の煩惱のへドロである。また「それ人間に生れたることは大きな喜びなり」と源信僧都は仰言る、それなのに人生を醜悪にするのは、五濁悪世にあつて煩惱熾盛の我等が織りなす罪障のせいである。

八十年の生涯を静かに終ろうとされる釈尊の御目に、美醜を超えた真美の世界と、苦楽を超えた大楽のいのちを心から讃歎されたのである。

然し人間釈尊にとつて痛ましいことは、舍利弗の死と目連が盗賊のために殺害せられたことと、養母のプラジャパティの入滅であつた。

釈尊のクシナガラ城に向われる途中、病苦に難渋せられ続けられたが、大工のジュンダの最後の供養を受けられ、法を施されたけれど、その時の供養の食がもとで病勢はいよいよ悪化せられた。そのことを歎き悲しむジュンダに釈尊は慈悲の心から「成道の時の供養と入涅槃の時の供養が

者の人々に看護られながら、八十年の生涯を終られたのであつた。

然しここで特筆せねばならぬことは、仏教初期に出来た長阿含經には、開卷第一に釈尊の大般涅槃を記して段々と釈尊の記録が迷つてあることである。そこに肉身の釈尊は亡び、八十年の生涯は終つたけれど、そこから真実の教法が生れ、新生の釈尊は永遠に生き続けられたのである。いふなれば釈尊の入涅槃から真実の釈尊の伝記ははじまり、入涅槃は釈尊の誕生であるということに驚ろかされる。

大無量壽經には「滅度を示現して、極済すること極りなし」とある。私共卑近な例で申せば、私共は親を失ふことによつて真実の親心がポツポツ知れはじめる、それも年と共にあきらかに強くあらわれてくる。私はよく親に別かれた人に、これから親に会いはじめる、と云つておる。三世にわたる久遠のみ親にまします釈尊もまた、滅度をとられることによつて、内面的に人々の心に無限にまことのいのちと光をとどけて下さるのである。

仏滅後、二千五百余年の今日、本願をきき念仏申されるところ、仏心のまことは現に私共愚悪の身にひたひたと交流して下さることがその何よりの証拠である。

娑婆永劫の苦をすてて 浄土無為を期すること
本師釈迦のちからなり長時に慈恩を報ずべし

四七年、二月仏涅槃の日に。

あ と が き



花祭りの行事があちこちに催される四月となりました。業を卒えて社会に巣立つ者、新入学生の嬉々とした姿が街にあふれて、一段と賑やかに花やいでおります。

しかし、慈光誌に度々原稿を頂き、また色々とお導きをうけておりました三瓶徳英老師が、二月末に九十二歳で遂に往生されました。先年植樹祭で両陛下が鳥根県に行かれた時、長寿者の代表として親しくお迎え出来たことを老いの喜びとしていられましたが、本年正月頃から老病のため段々衰弱せられ、その間、臥床のまま祖師の御教えを思い浮べておよろこびの由、二月八日附で頂きましたのに、名残りのつきませぬことであります。

近角先生は、歎異抄を黄金を掘り出す思いがすると讃仰していられますが、丁度蓮如上人が安心決定抄を四十年読み続けられ

て、何時も黄金を掘り出す思いがすると仰言ったことも思い併せられます。

福島先生の「浄土の音楽」のお示しは、八句をすぎられての御心中深くに感得せられますままをありありと知らされます。私のようなたまさかでないれば仏法の夢は見えないような者は、ただ慚愧申すばかりであります。

一道会の記は、西元さんの述懐、色々といつがさされますことでもあります。

高原誠さんが、御尊父、篤信の高原憲先生の教えを身にうけられて、医学の真実の道を迎って下さることはありがたい限りであり、現代医学の盲点をよく自覚されて深く省みられていることも敬服させられることでもあります。

念仏詩抄もすでに十一回目となり、寸言をもって無尽の法味を知らせて頂き得て妙であります。

二月の涅槃会を迎えて、晩年の積尊の姿をあらためて読みかえし、障りの多い中にある不滅の法灯がいよ／＼輝き出ていることをたのもしく渴仰いたしました。

三月十一日に白井先生は八十四歳の御身体を、御令息と御息女に護られて名古屋教育会館で「人は如何に生くべきか」の題で二時間半ばかり懇切にお話下さいました。一期一会の思いで耳を傾けて聴聞する人々の姿も尊いことでありました。

御案内

- 毎月第一、二、三日曜午後一時半。
- 南区駄町二ノ八八、一道会館、例会。
- 市電、新郊通り一丁目下車。
- 東入ル、三筋目左入ル。
- 毎月二十四日、午前・午后。
- 昭和区小椋町、教西寺、法話会。
- 市電御器所通り下車。
- 市バス北山下車。

定価	半年	四〇〇円(送共)
	一年	八〇〇円(送共)
編集・発行人	名古屋市南区駄上町二ノ八八 花田 正夫	
印刷	愛知県西加茂郡三好町大字福谷 吉野穂志郎	
発行所	名古屋市南区駄上町二ノ八八 慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	
郵便番号	四五七	